

TAID

Letter 27



富山県美術館
アート&デザイン



民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある

2024年7月13日(土) - 9月23日(月・休)



ポスタービジュアル Design: 永井裕明

上から 染付雨降文猪口 肥前有田(佐賀) 江戸時代 18-19世紀 / 染付羊歯文湯呑 肥前有田(佐賀) 江戸時代 18-19世紀 / 染付蝙蝠文湯呑 肥前有田(佐賀) 江戸時代18-19世紀
いずれも日本民藝館蔵 Photo:Yuki Ogawa
刺子足袋 羽前庄内(山形) 1940年頃 日本民藝館蔵 Photo:Yuki Ogawa

約100年前に思想家・柳宗悦は、市井の人々の暮らしで用いられてきた手仕事の品に美を見出し、民衆の工芸を「民藝」と呼びました。本展では、そうした民藝の品々約150件を展示致します。

「第Ⅰ章:1941生活展」では、柳自ら1941年に日本民藝館において企画した「生活展」の再現を試みます。また、「第Ⅱ章:暮らしのなかの民藝」では、市井の人々によって作られ、用いられてきた品々を、衣・食・住という切り口からひも解きます。

「第Ⅲ章:ひろがる民藝」では、富山県八尾の和紙など国内5つの産地の“いま”を紹介する展示や、現在の民藝ブームをけん引するセレクトショップ「MOGI Folk Art」のディレクター、テリー・エリスと北村恵子が世界各地で見つけた品々と現代の暮らしを融合した「これからの民藝スタイル」をインスタレーションとして展示します。

柳が説いた生活の中的美、民藝とは何か、そのひろがりや今、そしてこれからの姿を展望する展覧会です。

開催概要

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで)

休 日 毎週水曜日(ただし8月14日は開館)、
7月16日、9月17日

会 場 富山県美術館2階 展示室2、3、4

主 催 富山県美術館、北日本新聞社、北日本放送、
朝日新聞社、東映

特別協力 日本民藝館

協力 静岡市立芹沢銈介美術館、カトーレック

協賛 立山科学グループ、トヨタモビリティ富山(五十音順)

観覧料 一般1,300円(1,000円)、大学生650円(500円)、
高校生以下無料 ※()内は、団体料金

イベント情報

【ギャラリートัวร์】 本展担当学会員が見どころなどについてお話しします。

①2024年8月24日(土) 14:00~14:30 ②2024年9月7日(土) 14:00~14:30

集合場所:2階 展示室4(本展会場入口内すぐ)、参加自由 ※企画展観覧券が必要です。

インフォメーション

館内ショップ限定販売

宮入圭太 アートサコッシュセット(本展観覧券つき) 販売価格:2,800円(税込) 数量限定

今、注目の染色家／アーティスト・宮入圭太氏の描きおろし作品が
あしらわれたサコッシュ(斜め掛けの小型バッグ)に、本展観覧券(一般1,300円)1枚が付いたセットを、
当館ショップにて限定販売いたします。

・本セットは富山県美術館1階ショップのみで販売

・セットのサコッシュは本セット限定デザインです。

同サイズで別デザインのサコッシュを1,800円(税込)でショップにて販売予定。

見どころと出品作品



左上:日本民藝館「生活展」会場写真 1941年
右上:流水に桜河骨文紅型着物 首里(沖縄) 19・20世紀前半 静岡市立芹沢銈介美術館蔵 左下:鹿沼箒 下鹿沼郡(栃木) 1939年頃
右下:[左から]角酒瓶 小谷眞三 倉敷 1979年頃 / 酒瓶 小谷眞三 倉敷 1985年頃 / 栓付瓶 メキシコ 20世紀中頃 Photo:Yuki Ogawa

POINT

第I章：1941生活展 — 柳宗悦によるライフスタイル提案

1941(昭和16)年、柳宗悦は自身が設立した日本民藝館(東京・目黒)で「生活展」を展開。民藝の品々で室内を装飾し、いまでいうテーブルコーディネートを表示しました。暮らしのなかで民藝を活かす手法を提示した、モデルルームのような展示は当時珍しく、画期的でした。第I章では実際に出品された作品を中心に、「生活展」の再現を試みて、柳が説いた暮らしの美を紹介します。

第II章：暮らしのなかの民藝 — 美しいデザイン

柳宗悦は、陶磁・染織・木工などあらゆる工芸品のほか、絵画や家具調度など多岐にわたる品々を、日本のみならず朝鮮半島の各所、中国や欧米などへ旅し、収集を重ねました。時代も古くは縄文時代から、柳らが民藝運動を活発化させた昭和にいたるまでと幅広く、とりわけ同時代の、国内各地で作られた手仕事の日常品に着目し、それらを積極的に紹介しました。第II章では民藝の品々を「衣・食・住」に分類し、それぞれに民藝美を見出した柳の視点をひも解きます。

第III章：ひろがる民藝 — これまでとこれから

柳宗悦の没後も民藝運動は広がりを見せました。濱田庄司、芹沢銈介、外村吉之介が1972(昭和47)年に刊行した書籍「世界の民芸」では、欧州各国、南米、アフリカなど世界各国の品々を紹介。各地の気候風土、生活に育まれたプリミティブなデザインは民藝の新たな扉を開きました。

一方、民藝運動により注目を集めた日本各地の工芸の産地でも、伝統を受け継いだ新たな製品、職人たちが誕生しています。本展では国内5つの産地から、これまでと現在作られている民藝の品々や、そこで働く人々の“いま”を紹介します。そして、本章最後では、現在の民藝ブームの先駆者ともいえるテリー・エリス／北村恵子(MOGI Folk Artディレクター)の愛蔵品や、世界各地で見つけたフォークアートが“いま”の暮らしに融合した「これからの民藝スタイル」を、インスタレーション展示で提案します。

第14回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2024

The 14th International Poster Triennial in Toyama 2024

2024年10月12日(土) - 12月15日(日)



「第14回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2024」第一次審査の様子 撮影:柳原良平

世界ポスタートリエンナーレトヤマ(通称:IPT)は、今日のポスターデザインの状況と成果を紹介するため、国際的に作品を公募・選抜する日本で唯一の国際公募展です。1985年の創設以来、3年に1度のトリエンナーレ方式で開催を続け、現在では世界的に注目されるポスター公募展に数えられています。

14回目を迎える今回の公募では、紙媒体のポスターを対象としたA、B部門、若手対象のデータ応募によるU30+Student部門の全3部門で作品を募集し、世界約70の国と地域から約4,500点のポスターが寄せられました。

これらの応募作品にたいし、2024年4月16日、17日の2日間にわたり行った第一次審査員による厳正な審査により、IPT2024の展覧会で展示する入選作品が選ばれました。これらの入選作品から、10月の開会直前に行われる第二次審査において、最高賞となるグランプリをはじめとする各賞が決定します。

IPT2024では、入選作品に実行委員・審査員作品を加えた充実した内容を通して、世界の最先端をゆくポスターデザインを紹介します。世界から富山に集まったポスターに映し出される世界の“いま”に出会う展覧会。本展の最新情報は、富山県美術館ウェブサイトでお知らせします。

開催概要

開館時間	9:30-18:00(入館は17:30まで)
休館日	水曜日、10/15、11/5
会場	富山県美術館2階 展示室2、3、4
主催	富山県美術館
後援	公益社団法人 日本グラフィックデザイン協会(JAGDA) 東京アートディレクターズクラブ(TOKYO ADC) 東京イラストレーターズ・ソサエティ(TIS) 「ポスターの街・とやま」実行委員会
協力	YKK株式会社
協賛	五洲薬品、NIX JAPAN(五十音順)
観覧料	一般1,300円(1,000円)、大学生650円(500円)、高校生以下無料、一般前売り1,000円 ※()内は、団体料金

※会期中のイベント、ギャラリートークなどの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

IPT2024 審査員

第一次審査員	色部義昭、上西祐理、川上典李子、佐藤卓、永井裕明、藤崎圭一郎、三木健、室賀清徳(五十音順)
第二次審査員	ディーン・ブール(ニュージーランド)、ニッキー・ゴニッセン(オランダ)、浅葉克己、佐藤卓、三木健



前回 (IPT2021) の会場風景 撮影:柳原良平

POINT

世界から集まる、表現とメッセージ

今回の公募にも約70の国と地域の、学生から第一線のプロフェッショナルまで、幅広いデザイナー、クリエイターから応募作品が寄せられました。そのなかから選抜された入選作品は、日本はもとより、アジア、ヨーロッパ、中東やアメリカ大陸など多種多様です。展覧会のポスター、広告、いまの社会にむけてビジュアルにメッセージを乗せたものなど、ポスターデザインの最先端を知る機会です。

印刷物としてのポスターの迫力

デジタルのメディアで様々なグラフィックに出会うなか、実物の印刷物であるポスターが一堂に展示されるIPTの会場の雰囲気は格別なのではないでしょうか。例えば、ヨーロッパの街で実際に貼られるような、身の丈に近いサイズで印刷されたポスターなどには、実物のグラフィックデザインが放つ迫力があります。印刷の細部や紙の質感などにも、国や地域の特色が感じられます。

審査員も制作! 自主制作部門のテーマ「THINK()」

毎回、IPTの自主制作部門 (IPT2024ではB部門、U30+Student)では、作品募集にあたり実行委員会が決定するテーマを設けています。IPT2024でのテーマは「THINK()」。()の中に言葉を入れて、制作者が何を思い、何を伝えるかまでを問うテーマとなりました。応募作品はもとより、このテーマで、実行委員・審査員のデザイナーの方々にも新作ポスターを制作いただきました。世界第一線で活躍するデザイナー各氏による「THINK()」は、昨年、コレクション展示でご覧になった方も多いと思いますが、IPT2024の展覧会でも展示します。

北日本新聞創刊140周年記念

「エッシャー 不思議のヒミツ」関連イベント

講演会「エッシャーが愛され続ける理由」

5月12日(日)14:00～15:30

講師：熊澤弘氏（東京藝術大学大学美術館教授）

会期中、講演会やギャラリートークを実施しました。

特に講演会では、この企画展を多面的に概観することができる内容となりました。20世紀に版画家として活躍したエッシャーですが、そのエッシャーの評価や功績の現状のお話しでした。

当時の時代背景や人生の歩みをたどりつつ、エッシャーは美術史の流れで位置づけられる機会はなかなかなく、むしろ美術以外の文脈——文学、映画、漫画、数学、教育現場などで幅広く理解され、人気が高いということ、具体的にたくさん例示していただきました。パラドックスや相対性などの科学的見地をわかりやすく作品化したのがエッシャーだといえるため、映画や漫画などの分野では、エッシャーへのオマージュが使用されやすいことなど、1960年代から現代にわたるエッシャーの受容の流れもお話しいただきました。多世代にわたる来場者の方々は、エネルギーがみなぎる講演に、熱心に耳を傾けていらっしゃいました。



四館連携企画展

立山・黒部の魅力 再発見!～山河をめぐる歴史・文学・美術～

2024年6月7日(金) - 30日(日) 会場：富山県水墨美術館 展示室1・2



オープニングトークの様子



水墨美術館での当館作品展示の様子

「黒部宇奈月キャニオンルート」の一般開放で注目が高まる「立山・黒部」の魅力に歴史・文学・美術の見地から迫る企画展を、富山県美術館、水墨美術館、立山博物館、高志の国文学館の四館が協力して開催しました。展覧会の初日には、六角精児さん（俳優・ミュージシャン）と各館の4館長によるトークイベントも開催し、多くの方にご来場いただきました。展覧会に合わせて、四館周遊スタンプラリーも実施し、こちらは9月1日(日)まで行っています。展覧会は6月30日(日)までですが、この機会に四館をお訪ねください。

オープンラボ

「かたどる! いろどる! ステンシルカレンダー」

「民藝 MINGEI—美は暮らしのなかにある」展では、富山の八尾和紙を使った芹沢銈介氏の型染カレンダーを展示しています。季節のさまざまな図柄は、型を使った転写によって印刷されています。この型染カレンダーを参考に、ステンシルでオリジナルカレンダーをつくりましょう!



※図柄は変更になる場合があります。

開催概要

開催期間 2024年7月4日(木) - 10月1日(火)

活動時間 10:00 - 12:00 / 14:00 - 16:00 ※最終入場は30分前まで

会場 3階ラボ(アトリエ内)

定員 24名(1テーブルにつき4名まで)

対象 ども〜大人までどなたでも

参加無料、事前申込不要、時間内随時受付

※都合により、お休みする場合があります。あらかじめご了承ください。

トピックス

富山大学芸術文化学部卒業制作展セレクション



昨年の展示会場の様子

開催概要

会期 2024年9月7日(土) - 9月23日(月・休)

開場時間 9:30 - 18:00 (入館は17:30まで)

休館日 9月11日(水)、9月17日(火)、9月18日(水)

会場 1階TADギャラリー

主催 富山大学芸術文化学部、富山県美術館

後援 富山県

観覧料 無料

《本保裸婦像—複製》 袴田京太郎 / 《裸婦像》 本保義太郎

2024年 アクリル板 H185×W53×D53cm (令和5年度新収蔵作品) / 1896年頃 石膏 H37×W10×D10cm



青と白の縞模様がまず目に飛び込んでくる。等身大の裸婦像だが、強いストライプに目が幻惑されて形が見極めにくい。よく見るとやや大きめの頭部は日本髪を結び、肩もやや撫で肩で、恥じらうように腰に布をまとっている。西洋彫刻を範とした堂々とした裸婦像とは、およそ趣きを異にする。日本的、といてもひと昔もふた昔も前の趣きである。それが現代的な彫刻として作られているところに大きな戸惑いが広がる。奇異なのである。

本作は彫刻家・袴田京太郎(1963-)が、当館が所蔵する明治初めの彫刻家、本保義太郎の小さな裸婦像をもとに「複製」したものである。本保は1875(明治8)年、今の富山県高岡市の仏師の家系に生まれた。早くから優れた技量を身につけ、開校間もない東京美術学校木彫科で竹内久一や白井雨山に師事した。当時同校で美学、西洋美術史を講じていた森鷗外の詳細な講義ノート(当館蔵)を残したことで知られる。1904年セントルイス万博に出品渡米し、翌年パリに渡って1907年のサロンに入選。審査員長だったロダンに直接面会した最初期の日本人の一人となるも、同年10月、32歳の若さ

で彼の地で病没、残された作品は少ない。日本髪を結った裸婦像のどこか控え目な初々しい感じは、西洋の「彫刻」というものに日本人が初めて出合って咀嚼しようと苦悶した、明治期日本の若々しい時代の興趣を伝えるものである。

翻って袴田は、本保が生きた時代からおよそ100年、すでに「彫刻」というものが「絵画」同様、拡散し自明ではなくなった1980年代に制作を始めている。近代彫刻への疑問や違和感から出発し、彫刻の複製性や彫刻がうちに秘めてきた空洞／空虚さを問うてきた。本作は、当館で2023年に行われた滞在制作「アーティスト@TAD」を機縁に制作された*。本保作品を3Dスキャンし、形をおこしてアクリル板を切り抜き、積層する手法で制作されている。明治の初め、骨格(軸心)をいかに(それがうちにあるかのように)作るかに苦心して生まれた「彫刻」を、「彫刻」の内部には何も無い(空洞／空虚である)ということ、を、文字通り「彫刻」にしようとしてきた現代の彫刻家が「複製」した彫刻なのである。

(富山県美術館 主幹・学芸課長 以倉新)

*滞在制作では、スタイロフォーム(青)と発砲スチロール(白)積層による高さ約4mの像が制作された。本作はその後、作家の代表的な手法であるアクリル板積層により制作された。

参考文献:

「アーティスト@TAD袴田京太郎 複製する(陰の彫刻)」記録冊子、富山県美術館、2023年
「令和3年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館コレクションによる山形で考える西洋美術 | 高岡で考える西洋美術—(ここ)と(遠く)が触れるとき」展図録、山形美術館・高岡市美術館、2021年

富山県美術館(TAD)

〒930-0806 富山県富山市本場町3-20(富岩運河環境公園内) tel.076-431-2711 fax.076-431-2712 <https://tad-toyama.jp/>

表紙(上から)緑黒袖掛分皿 因幡牛ノ戸(鳥取)1931年頃／流描皿 河井寛次郎 京都1927-28年頃／藍鉄絵紅茶器 清田庄司 栃木 1935年頃／食器棚 イギリス 19世紀
いずれも日本民藝館蔵 Photo:Yuki Ogawa